

発明文化論

〈第 89 回〉

丸山 亮

写真史の断面

デジタルカメラの時代、写真の撮影は誰にも失敗なくできるようになった。技術的には驚くべき進歩だが、シャッターを押し、画像を固定するときに感じる創造の喜びは、逆に減ったのではないか。

子供のころ、家の雨戸に空いた節穴から射してくる朝の光が、内側の障子に上下の逆転した画像を結びのを見て、不思議な気がしたものだった。今思えば、カメラの語源となるカメラ・オブスクラになっていたわけだ。ルネサンス時代、画家はこの現象を利用して風景を画紙の上に固定し、写生の補助とした。けれども像を描くのは、あくまで画家自身の手だった。

感光材を使って画像を固定するのに成功したのは、19 世紀に入ってからのこと。フランスで、ニセフォル・ニエプスはアスファルトの感光性に着目し、太陽光により取り込んだ像を定着する方法を思いつく。こうして 1826 年、自らのアトリエから望まれる窓外の屋根を、8 時間という長時間の露光によって撮影した。ヘリオグラフィーと呼ばれる発明の誕生だ。

同じころフランスの画家で写真法の研究を進めていたルイ・ダゲールという人物がいる。ダゲールはニエプスの協力を得て、1837 年、銀板上にヨウ素の蒸気でヨウ化銀の膜を形成し、感光させる写真法に到達する。撮影後に水銀蒸気を当てると銀板上に像が現れるもので、1839 年、フランス政府はこの発明に特許を与えた。写真機は前面にレンズを備えた入れ子の箱を前後にスライドして焦点を合わせ、後面に感光材を配している。シャッターはなく、露光はレンズキャップの開閉によって行う。この単純な写真機の構造と銀板に画像を固定する方法とを合わせ、ダゲレオタイプの写真術として後の発展の端緒となった。

写真術がさらに飛躍するためには、像の複製が容易に行えることと、取り扱いが容易な紙に印画する方法が必要となる。そしてこの発明は、ダゲレオタイプの発表からわずか 1 年後、英国人ウィリアム・タルボットによって世に出た。感光材に銀塩を用い、紙の上にネガの画像を作った後、それを反転させて再び紙の上にポジを得るもので、カロタイプと呼ばれる写真術の発明だ。タルボットはこの方法を秘密にしていたため、発明の名誉をダゲールに譲ることとなった。

鮮明な像を短い露光時間で得ることが以後の課題となり、やがてガラス板にコロジオンと呼ばれる薬液を塗って感光性を与えたものを撮影直前に用意する湿板写真が登場する。1851 年、イギリスのフレデリック・スコット・アーチャーが発明したコロジオン湿板写真で、露光は数秒ないし 2 分にまで短縮された。日本では幕末から明治にかけて流行し、その後も長く昭和になるまで利用が続く。我が家には写真を趣味にした父がガラス板に写したネガが沢山あったが、いつの間にか散逸してしまった。

写真術の発展とともに、記録や再現性では写真が絵画を凌駕していく。一方、写真を芸術表現に用いる試みも盛んになってくる。その過程で 19 世紀末から 20 世紀の初頭、ピクトリアリズム（絵画主義）という潮流が現れる。写真が当時の絵画表現に接近していくのだ。先日、富士フィルムスクエアで開催中の「ピクトリアリズム 近代写真の夜明け」展に引かれて会場を訪れた。ロベール・ドマシーが 19 世紀末に撮影した「エメリンとキティー」の一枚など、ルノワールの肖像画を見ているような質感と印象を与える。エミール・コンスタン・ピュヨーの池に映った姿を見つめる乙女らの写真。これもラファエル前派のタブローを前にしている思いがする。これらは銀塩でなく鉄塩の感光性を使い、手がかかるプラチナプリントを行っている。写真史は一直線でなく、退行と遡行の軌跡でもある。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)